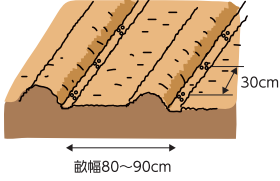
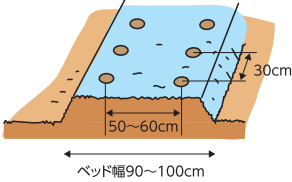


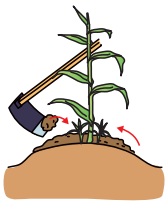
【図1】土作り(1条植え)



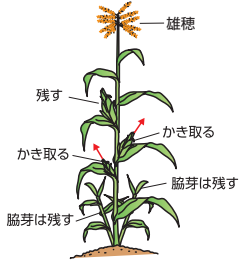
【図2】土作り(2条植え)



【図3】追肥・土寄せ



【図4】雌穂のかき取り



味が減少するため、早朝に収穫して早めに冷蔵庫に入れましょう。もちろん、すぐに茹で上げて食べるのが一番です。

遅霜の心配のない4月下旬～5月中旬が種まき期です。なお、苗から育てる場合は、本葉2～3枚、

【栽培時期】

「みわくのコーンゴールドラッシュ」(サカタのタネ)、「おひさまコーン」(タキイ種苗)やバイカラーと呼ばれる黄色と白色が混じっている「ゆめのコーン」(サカタのタネ)などがあります。

【品種】

スイートコーンは、温暖で強い日光を好む強健な野菜です。雄花が雌花より先に咲き、受粉のタイミングがずれやすいため、集団で育てることが実入りを充実させるポイントです。

チャレンジ! 野菜作り

取れたてが甘くておいしい スイートコーン



園芸研究家 成松次郎

【土作り】

1㎡当たり苦土石灰100gをあらかじめ散布しておきます。次に、畝幅80～90cmを取り、深さ20cm程度の溝を切ります。この溝1m当たり化成肥料(N・P・K 10・10・10%のものが最適)150gと堆肥1kgを施し、畑の土とよく混ぜておきます(図1)。

【種まき】

2条植えの場合、幅90～100cmのベッドを作り、1㎡当たり化成肥料200gと堆肥2kgを全面に施して、畑の土とよく混ぜます。そして、ベッドを平らにした後、早まきではポリマルチをします(図2)。

【管理】

布をべた掛けしましょう。

草丈10～15cmで間引く苗を切り取り、1本立てにします。追肥は草丈50～60cmの頃、畝1㎡当たり化成肥料50gを列の片側に与え(2条植えでは1㎡当たり100gをベッドの両側)、株元へ土寄せします(図3)。そして、上の方の雌穂1穂にすれば大きい穂になります。

なお、脇芽は特に取り除く必要はありません(図4)。

【病害虫防除】

雄花がつき始めるころ、害虫のアワノメイガが葉の裏に産卵し、大きくなった幼虫は雄穂や雌穂(子実)を食害します。茎や子実に入り込んだ幼虫を防除するのは困難なので、雄穂が伸びだす頃に殺虫剤を散布します。

【収穫】

絹糸が出てから3週間ほどたち、絹糸が褐色に変わり、先端の子実が乳白色に着色した頃に収穫します。収穫後は急速に甘

肥料・農薬のご紹介

食害から守る!

トウモロコシ 専用殺虫剤



デナポン 粒剤5

「トウモロコシを収穫してみたら虫に食べられていた」ということはありませんか?

その原因はアワノメイガの幼虫です。この害虫は、葉の裏で孵化した後、茎の中に入りトウモロコシを食害していきます。

そんな時に役立つのが「デナポン粒剤5」です。手で簡単に散布でき、殺虫効果も長く続きます。

茎の先から雄穂が出る時期と葉の脇から雌穂が出る時期の2回、葉の上や葉と茎の間によくかかるように、上からパラパラまきます。食害されてからでは遅いので、被害が出る前に防除しましょう。

【注意】

- ミツバチや蚕に対して影響があるので注意してください
- 使用前にラベルを確認してください

※ご不明な点は各営農センターまでお気軽にお問い合わせください



今月の農家さん

無理せず慣れていく

野洲市高木
小森 喜一さん (59才)



奥様と2人で、水稲や小麦、大豆などを育てている小森さん。

元々は自動車修理の仕事をしながらの兼業農家でしたが、13年ほど前に近隣の農家さんから田んぼを預かった事がきっかけで、農業に専念するようになったそうです。

「専業農家になって最初の3年ほどは仕事に慣れず、アルバイトでしのいだ事もありました。でも、周りの農家さんやJAのサポートのおかげで、仕事を軌道に乗せる事が出来ました」と小森さんは当

時をふりかえります。

今では17ha以上の田んぼを管理するようになり、少しずつ作付時期をずらす事で作業する時期が片寄らないよう工夫したり、機械や一発肥料など便利な物をどんどん取り入れて省力化したりと、農作業の効率化に力を注いでおられます。

最後に小森さんは、これから農業を始める人に向けて「農業は計画通りにいかない事も多いです。最初は無理せず、慣れてから事業を拡大する事が、長続きのコツですよ」とエールをおくりました。

営農情報

◆中干しを徹底しましょう！

◆品質向上のために

中干しとは、田んぼから水が落ちて乾かす事で、稲の根張りを強くする効果や過剰分けてを防ぐ効果があります。良く根が張った稲は、倒伏しにくく、登熟期の高温に強く耐えます。過剰な分けつを防ぐ事は、稲穂へ栄養を誘導する効果があり、乳白米の減少や粒径の確保など米の品質向上につながります。

◆こんな効果も！

中干しをする事で、田んぼの水はけがよくなり、間断灌漑や落水などの水管理が行いやすくなります。これにより収穫前の落水時期を遅くできるので、胴割れ米を防ぐ効果も期待できます。

また、中干しにより、落水後に地面が乾きやすくなるので、収穫期にはコンバイン作業が円滑になります。水稲収穫後に麦などを育てる場合にも有効です。

田んぼに水を張り続けていると土壌中の酸素が少なくなると、温室効果ガスであるメタン

が発生しやすくなります。中干しをして酸素を送る事は、ガス発生を防ぎ、温暖化を抑制する効果もあるのです。

◆中干しの進め方

中干しを始める時期は、稲の茎の数を見て決めます。左表を参考に、目標茎数の8割が確保できた頃が目安です。

7～10日間、地面に浅い亀裂が生じる程度まで続け、再度入水しましょう。あまりに乾燥させすぎて、深い亀裂が発生すると、稲の根を傷付けてしまうので注意してください。

また、中干しを行う際には、ほ場の中と外周に溝切りをする、水管理がスムーズになり、入水や落水が簡単になります。

坪当たり株数	目標茎数	中干しを始める時期
60株/坪	17～18本	15本前後
50株/坪	20～21本	18本前後

高品質なお米を作るための確かな技術なので、中干しをぜひ実践していきましょう。